２０２５年０３月０６日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２６頁

「現実」触れ 認識新たに

文人の武蔵野

三浦朱門 ⑦

三浦朱門（1926～2017年）は、東中野で生まれ、高円寺で育ち、東京府立第二中学校（現・都立立川高校）に進んだ武蔵野の文人です。

この作家についてご存知の方は、どのようなイメージを持たれているでしょうか。ひとかどの人物だと思われるのですが、インターネット上では、あまり評判がよくないようです。

妻で今年2月に93歳で逝去した曽野綾子とともに、無責任に「ゆとり教育」を推進した保守的なクリスチャン作家で、教育課程審議会会長、文化庁長官などの要職を務めた高学歴かつ選民思想の差別主義者であるとみる向きもあります。

三浦の小説「武蔵野インディアン」の主人公の太田久男は、末尾で「インディアン」を「現実に立脚して生きている者」と広く読みかえ、「理想郷を求めて放浪している白人とは、教育学者や久男たち、紙とインクの世界しか知らない者のことなのだ」という認識に至り、物語はとじられていました。

三浦朱門と妻で作家の曽野綾子。文壇を代表するおしどり夫婦として知られた（2010年撮影）

久男は教育学者と対談で意見が対立し、「やっつけられた」はずでした。ですが、「現実に立脚して生きている者」からしたら2人はともに「理想」を求める「白人」（侵略者）であり、学者や教師や作家の考える範疇（はんちゅう）の外側にこそ子どもたちの「現実」がある、といった解釈ができるでしょうか。

作家であり教師でもあった久男が我が身を謙虚にふりかえり、そうした物の見方を発見できたのは、「武蔵野インディアン」たる高校の同窓生や教え子から「現実」を教えられたからでした。

三浦の「武蔵野ものがたり」（集英社新書）を読むと、東京府立第二中学校に「武蔵野インディアン」たちのモデルがいたのがわかります。

三浦朱門とは、どのような人物だったのでしょうか。その全体像を捉えた人はまだいないと思われます。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。